軍記物語と民間伝承

福田晃著

民俗民芸双書 66

福田　晃（ふくだ　あきら）

昭和7年，福島県会津若松市に生まる。昭和34年，国学院大学文学部文学科卒業。昭和40年，国学院大学大学院日本文学専攻博士課程修了。大谷女子大学文学部助教授を経て，現在，立命館大学文学部教授。専攻，唱導文学・口承文芸。

著書　『神道物語集(一)』（共編）　『彰考館本曽我物語』（共編）　『蒜山盆地の昔話』（共編）　『大山北麓の昔話』（共編）

現住所　大阪府寝屋川市秦927　A85の206

民俗民芸双書　66

軍記物語と民間伝承

一九七二年二月十日　第一刷発行
一九七三年四月十日　第二刷発行

著者　©福田晃
発行者　岩崎治子
印刷　光明社
製本

発行所　岩崎美術社
東京都千代田区神田神保町一ノ六五
電話　東京(二九一)三一二二-四
振替　東京　九〇六四九
定価は外函に明示してあります

著者了承・検印廃止

目次

民間伝承と平家物語……五
一　民間語り物研究の課題……五
二　民間語り物研究の分類……七
三　民間語り物研究と平家物語……二二
平家物語の民俗学的研究方法……二七
一　国文学の民俗学的研究……二七
二　平家物語の民俗学的研究……二八
三　伝承の実証……三三
四　結び……四〇
平家物語と高野山……四三
——初期念仏聖の活動をめぐって——
一　北九州の念仏聖……四三
二　念仏聖西行と念仏聖像康頼……五〇
三　俊寛説話と念仏聖……五九

平家物語の文学性……六八
——その社会性とのかかわりから——
一　文芸の社会性……六八
二　平家物語の社会性—その怨霊をめぐって——……七三
頼朝伊豆流離説話の生成……八三
——平家物語・曽我物語より——
一　頼朝流離説話の内容……八三
二　頼朝説話の史実と虚構……八八
三　頼朝伝説の発生—史実と民俗——……九一
四　頼朝流離説話の生成管理……一〇〇
五　真名本曽我物語における頼朝説話の性格と
　　源平闘諍録における頼朝説話の生成……一〇六
六　結び……一一五
「頼朝伊豆流離説話の生成」補説……一一七
——史実と物語との間——
一　吾妻鏡における史実と虚構……一一七
二　史実と物語……一二四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

曽我物語における人間像〈曽我兄弟〉……一三九
一　執念……一三九
二　涙……一三五
もろかど物語の伝承……一四三
一　諸伝本とその内容……一四三
二　諸伝本の伝承関係……一五四
三　諸伝本の性格―管理者―……一七三
盲人の一系譜……一八一
――甲賀望月氏系図をめぐって――
一　甲賀桜の宮の伝承……一八一
二　桜の霊の祭祀……一八四
三　花の下の座頭……一八九
四　甲賀望月氏と盲人……一九五
軍記物語の世界……二〇七
一　語り部の末流――『奥相茶話記』より――……二〇七
二　将門御霊の管理……二〇八
三　民俗から文学へ――曽我物語の成立――……二一一

四　戦場における念仏聖……二二三
五　高野聖の語り……二二六
六　軍記物語の成立とその終焉……二二八
あとがき……二三三

民間伝承と平家物語

一　民間語り物研究の課題

日本の民間伝承、すなわち民俗学が国文学と直接交渉する分野は、申すまでもなく、口承文芸の世界においてである。また、平家物語が元来「語り」を前提として成ったとすることを一応認めるならば、日本民俗学が平家物語研究と直接交渉する部分は、口承文芸における語り物研究ということになるであろう。

ところで、日本民俗学における語り物研究は、柳田国男氏をはじめとして、その他の諸氏により一応の成果を収めてきた。柳田氏の『雪国の春』（昭和三年）『黒百合姫物語』（昭和十九年）『物語と語り物』（昭和二十一年）、山口麻太郎氏の『百合若説経』（昭和九年）、今野円輔氏の『馬娘婚姻譚』（昭和三十一年）、安間清氏の『早物語覚え書』（昭和三十九年）、――民俗学畑ではないが、小倉博氏の『御国浄瑠璃集』（昭和十四年）室木弥太郎氏の『語り物舞・説経古浄瑠璃の研究』（昭和四十五年）――

などの著者がその主なものであるが、その他にも折口信夫氏・筑土鈴寛氏・三谷栄一氏らの秀れた論稿が発表されている。しかし、これらの成果は、民俗学における他の分野のそれに比するならば、――それぞれの業績の大きさはともあれ――必ずしも満足すべきものではない。特に生活諸相の伝承、すなわち有形・行為の伝承に研究課題の中心を据える今日の日本民俗学界の趨勢からすると、今後の成果もあるいは多くを期待できないかもしれない。そして、この日本民俗学の方向は、民間伝承の採集と整理とを学問の根底におくかぎりは、ある程度止むを得ないものがある。すなわち有形・行為伝承の採集には、無限ともいうべき可能性が見出されるのに対し、語り物の属する言語伝承のそれには、もはや遅きに失った段階が現出しているのである。特に言語伝承の中でも語り物は、同じ範疇にある昔話・伝説・民謡などと比べて、消滅の度合はもっとも急激なものがある。おそらくこれは語り物の伝承者が、昔話その他の場合と少し異って、これを伝える者が最後まで半ばこれを専業とする人びとであったがためであろう。明治以来の近代文化の波は、たちまちこれらの人々の生活の糧を奪い、近年のマスコミの力は、これらの伝承の多くを完膚なきまで叩きつぶしたのである。

さて、日本民俗学における語り物研究に関して、余りに悲観的材料ばかりを申し過ぎたようである。が、その研究が今日ではもはや不可能であるということではない。語り物のなまの資料を採集することは、ほとんど不可能に近いとは言え、それがまったく消滅してしまったわけではな

い。たとえば、東北の口寄巫女イタコの語りあるいは奄美のユタのそれなどは、いまだに採集可能の段階にある。また、その語り物のなまな姿に触れ得ないにしても、それをそのまま書き留めた台本を発見することは、まだ可能な領域にある。あるいは、また、なまの語り物にもその台本にも、もはや出会えぬとしても、その語り物の断片が伝説化してそれぞれの土地に膠着しているから、その伝説研究を通して語り物を明らかにすることは可能である。そして、わたくしの特に言あげしたいのは、中世以来の民間信仰色豊かな唱導語りのテキスト群（たとえば神道集などに収められているものにはじまる本地物語類）である。すなわち、これまでの日本民俗学の語り物研究に拠って、その資料的価値を見定め、あるいはこれを民俗の語り物資料に還元して利用するならば、その語り物研究はいよいよ大きな期待が寄せられるということになるであろう。

二　民間語り物研究の分類

さて、民俗学における語り物研究の一の目的は、民間にある語り物を採集整理し、他の分野の研究、特に民間信仰のそれに助けられながらその中に普遍の型を求め、やがてそこから民族の精神文化の特性を把握しようとするものであろう。そして、その究明の分野をわたくしなりに大まかにあげれば、次のように分類されるかと思う。

(イ)発生条件の類型　(ロ)テーマの類型　(ハ)伝承の類型　(ニ)管理者の別

(イ)は語り物を要求する常民の力であり、その信仰である。また、それと関連して語りの発する場なども当然問題となる。(ロ)は語り物の内容の問題である。すなわち、語られる事柄、そしてその主題に、ある共通の型の存することが予想されるのである。(ハ)は語り物の内容と絡む問題であるが、いわゆる語り口の問題である。発生以来の伝承者がその語り口に現われるわけで、それにも幾つかの型が存するようである。(ニ)は最終的に語り物を管理していた人びとの別であり、その人びとと今日の常民とのかかわり合いが問題となる部分である。なお、以上の分類は便宜上のことであり、実際はこの四部門が互いに絡みあって問題を提示していること、言うをまたぬところである。

そこでまず例として『黒百合姫物語』なる「矢島祭文」をあげて考えてみる。その内容は、出羽鳥海山の麓、由利郡の矢島に、矢島五郎という勇猛な武将があって、仁賀保を旗頭とする由利十二頭（党）の面々をあるいは討ち殺しあいは攻め悩し、最後はおのれも非業の死を遂げるというものである。

その発生の要因は、黒百合姫物語を囲む状況がもはや発生状態のままにない以上、容易には説明できない。しかし、この語りが戦国期にこの地方に起った悽惨な争闘の事実によっていることは確かであるから、民間信仰に関する民俗示例から推するなら、その発生の要因は、この争乱に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

非業な最期を遂げた霊に対する農民たちの恐怖心にあったといえよう。ならば発生の場はどうであろうか。元来語りがもっとも悲惨な悲劇的立場にあったものの側からおこるとすれば、わずか十年余りの間で、親子兄弟入聟四代までが無残な死を遂げた仁賀保側から語られてよいはずであるが、この語りは終始矢島の方に身をおいて話を進めており、この態度はこの事件を歴史記録風に記す「矢島十二頭記」なども同様である。これから推されることは、この語りの発生の場は、矢島の地、それもその鎮めのもっとも要求されたところ、すなわち、矢島の死霊の漂うところということである。

次にこの物語のテーマはどうであろうか。語られる世界は悽惨な争闘であり、壮絶な死である。ところが、結びは一応めでたしとも言えるもの、壮絶な死によって終っていないところに問題がある。矢島五郎の遺姫小百合姫は、「あげはの蝶」とひそかに契りを結び、一児緑丸を儲けながら、これを懐に抱いて年来の仇敵仁賀保を攻める。姫の猛勢に仁賀保は城をあけて和を乞う。が、姫の前に伏した仁賀保の嫡男蔵人は、なんと姫の恋う「あげはの蝶」。姫は愛児緑丸を仁賀保蔵人に渡して姿を隠し、矢島の築股の山里に庵室を結び、法華経を読誦して生涯を終えたという。静かな結びである。主題は恩讐を超えた世界ということであろうか。つまり、かかる結びによってはじめて語りの意図である鎮魂の業はなし得たのである。

次は伝承の問題であり、発生以来の伝承者の姿を見せる語り口である。柳田国男氏は、「矢島

十二頭記」をあげて、この書が普賢坊一派の山伏の活躍に意を用いていることから、長くこの派の山伏の手に保存せられたものと説かれ、「矢島では一時多くの遺臣が逃散して、ただ修験の徒のみが住み留まり、旧主を追慕していた時代があって、頻りに古い話をくり返して居たらしい」と推しておられる注(1)。この修験とは鳥海山修験であり、鳥海山矢島口にあった山伏である。彼らは矢島に属してその鳥海山への権利を保持していたのであるが、その没落によって彼らもまた衰微の一路をたどったのである注(2)。ところで、黒百合姫物語をみると、「十二頭記」類の見せた山伏の語り口は消えて、山伏と深い繋がりを持していた遊行巫女のそれが目立っている。すなわち、物語では、主人公矢島五郎満安はその父が鳥海山の女別当玉百合御前の姉娘玉鶴姫と契って生じたものと、他の事には見えぬ語りをなしている。また、矢島城落城の折に、鳥海山の女別当の宮の巫女月光が、矢島五郎のひとり姫小百合姫の命を守ったともしており、その小百合姫はやがて鳥海の女別当のもとに参り、ここで山伏・巫女を相手に仇討の修行をなし、そのかいあって本意を遂げたとする特異な語りをもなしている。鳥海の女別当とは巫女頭のことで、単に鳥海の社に仕える巫女を統括したのみならず、山伏に従いながら村里をめぐる遊行の巫女をも統べていたものであるから、黒百合姫物語には明らかに鳥海山に繋がる遊行口寄巫女の語り口が入っていると見てまちがいないであろう。柳田国男氏は、「十二頭記」の歌問答の部分などに座頭の臭いを感じておられる注(3)が、そうであるならば、一方で山伏により、さらに座頭により伝承され

語られている間に、この語りは巫女の間でも成長し、一つの語りを形成していたと言わねばならないだろう。そして、その巫女の語りがもとになって、黒百合姫物語なる矢島祭文は成ったもののようである。右のように、この語りの管理伝承は必ずしも単純なものではないが、この祭文で重要なことは、つまり、その語りの元来の伝承者たるもの自身が、物語の枠の如き役割をして注(4)、その語りを静かに閉めるという一つの伝承の型をもっていることである。

最後は黒百合姫物語なる矢島祭文自体の管理者である。この祭文は、右の如くに巫女の語りによっているが、これ自体を巫女が語ったというものではないようである。この語り物を世に紹介した藤原相之助氏によれば、同氏の幼ない頃、羽後生保内の生家にめぐって来た湯殿山の法印が、右の手を法螺貝のようにして語ったということである注(5)。それも、「二段ばかりでレン〳〵と流しになって私の方に向き『ソレキテ、トッピンパラリンプン』と申します」と説明されている注(6)ことからもわかるように、湯殿山の法印はこれを本気になって語ったものではなく、祈祷後の余興として子どもたち相手に昔話の一類の気分で語っているのである。ところで、同氏はこれを羽黒祭文としておられるが、戸川安章氏が疑っておられる注(7)ように、羽黒祭文というにもふさわしくないし、湯殿山修験の語りとしても不自然である。おそらくこれは元来鳥海山の修験の語り物として、真面目に語られていたものが、たまたま湯殿山法印が余興に憶えたものでしかあるまい。それの証拠に、これを語った湯殿山法印も、この語りをあくまでも矢島祭文と呼んで

いた。鳥海山麓の矢島の祭文ならば、鳥海山以外の修験がもともとは語るはずのものではないだろう。おそらく鳥海山の修験が、その信仰の及ぶ地方の農民たちに宣布していたものにちがいない。それも実はその地方の農民たちの怖れる霊を鎮めるために語られたものであろう。すなわち、矢島の亡霊を鎮める語りは、矢島以外のそれをも鎮めることができたからである。それはまた鳥海山信仰の唱導ともなり得たわけである。

以上が「黒百合姫物語」について発生の条件・テーマ・伝承・管理者などの大雑把な紹介である。さればつぎには、右の「黒百合姫物語」を通して、民間語り物文芸の世界に、もう少し立ち入ってみることにしたい。

発生の条件

「黒百合」では、悽惨な争闘に非業な死を遂げた霊に対する農民の恐怖心が要因としてあげられ、発生の場としては矢島の霊の漂う所があげられた。そして、この語りは、矢島一門の側にあった巫覡の口からまず発したとも想定されたわけである。戦乱において死霊の漂うところとは、壮絶な闘いのくり広げられた古戦場、特に怨みをとどめた廃墟の城があげられるであろう。が、また、争闘の事実に拠らずして、巫覡の妄想より廃墟の城らしき地に敗者の亡霊が漂い、その物語を語らしめることも実はあったのである。たとえば、白米で城の内の水の豊かさを誇示し攻め手の目を一旦は欺きながら、一老女の密告によりその秘密が敵の知

るところとなって落城したという白米城の伝説がそれで、これなどは城址らしき高台の地に起った亡霊が口寄巫女に託して語って聞かせた話であろうと推され、元来は歩き巫女たちが伝播したと舞台一種の語り物であったと考えられている[注8]。また、中世小説「もろかど物語」は、奥州栗原を舞台とする一種の合戦譚であるが、江戸時代には羽黒のデロレン祭文と化し、「森館軍記」と称されて、この他方に現今まで伝承されてきた[注9]。が、この場合も、その伝承の目やすは、城跡らしくみえる二つの「森館」の森山であり、それから推しても、この物語も元来はその合戦に倒れたと称する亡霊の漂う森館の森において語られたものであることが理解される。そして、この物語はこの舞台から東南二十粁の地登米郡豊里町に運ばれ、やがて「迫合戦記」と称されてボサマたちの語り物として行なわれた[注10]のであるが、この場合でもその伝承の目やすとなったのは、豊里町赤生津にあって月輪兄弟の城址と伝える小高い森山であった。つまり、この物語をこの地に誘引したのは、その砦跡と称する高台に夜な夜な現じた月輪兄弟の亡霊であったことが推されるのである。ところで、悽惨な争闘・壮絶な死、そして落城という事実があるならば、そこに語りの要求されることは当然であり、その意味で「黒百合姫物語」の発生は当然とも言えるものであった。しかし、その事実によらず、つまり争乱の事実を捏造するかのごとくして、その高台の地に鎮魂の語りの行なわれた所以は何であろう。もちろん、農民の凶作への不安、またそれを引きおこす因となる救われぬ霊への怖れのしからしめるところであることは申すまでもない。が、あえて余

り城址も考えられぬ山上の森や小高き山までもそれと主張するところに、発すべくして発した要因がひそんでいるかと推されるのである。すなわち、山形県庄内地方の「森の山」の民俗注(4)――この地方では、その部落から遥かに望まれる小高い山を「森の山」と称し、死者の霊の鎮まる所としており、特に八月二十三日には部落毎にそれぞれの「森の山」に詣って先祖の供養をする。これを「森まいり」「森くよう」と呼んでおり、口寄巫女もこの祭には重要な役割をつとめ、山伏は特に非業の死を遂げた人びとの供養に従事する。そして、その由来としては、戦乱をもってこれにあてることが多く、また、その起源をその折の敗死者たちの冥福供養にあったと説明するのが普通である。――などを参じて思われることは、かの白米城址と伝える小高い山も、「森館軍記」の森館跡と称する森山も、元来は死者の霊のいます所として信仰されていた地であったということである。

さて、かの東北の黒百合姫の物語が形成されるずっと以前に、はるか西南の地方に百合若の物語がおこつて、民間の語り物として行われていたが、現代までにその語りが壱岐島にかすかに留められていた。もちろん、この物語がいかなる地に発しいかなる場所において語り出されたものか、詳しくは明らかになし得なくなっている。その内容から察し、その伝説流布の状況から推して、おそらく百合若の死霊を祀る――史実はともあれ――九州方面の百合若塚などと称される地所において語られたものという程度のことは言い得よう。この語りがやがて壱岐に運ばれたので

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com